

Kodak

LICENSED PRODUCT

3/Color Black

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

護
豆
錦
書

616
十武9



門中武9
號 616
卷



護痘錦囊續編上
須知目次

- 第一 痘の轉機
- 第二 痘の八證
- 第三 痘の順險逆三證
- 第四 痘熱と他病の熱の辨
- 第五 正痘水痘の辨
- 第六 痘瘡麻疹の辨
- 第七 肌膚の善惡
- 第八 見点部位の前後
- 第九 痘の形色
- 第十 唇舌の善惡



續上

目次

一

此痘家須知十條六豫め心ゆかき事して急務ゆあらば
痘毒病人さ下かり急入用の所ハ正編の書に見出ると記せり
急務肝要の所より痘の期限のまをびよまをひようてん
引あてたづぬべー見ごー左のどー

護痘錦囊正編

まをひ	初て熱ゆる時容體に引あて見出るところぬべー
まをひ	痘みえてより三日の間は見出るところぬべー
まをひ	水うま三日の間は見出るところぬべー
まをひ	本うま三日の間は見出るところぬべー
かせ	かせ三日の間は見出るところぬべー

右ハ痘のまをひの順ゆ尋るに便ならしめ又驚引つけ或ハ
齒ぎまがりふる等の諸證と分類ゆてころぬまきたか
續編へいす

第一痘の轉機

○初熱 或ハ毒移或ハ毒重或ハ毒移り或ハ毒重

是痘の熱の初ていつる時より 初熱 見點 起脹
灌膿 收靨 落痂 各三日ツとゆども病の狂重ニ
よみて延縮あまこけて初熱ハ日數定らず其故ハ
風寒諸氣ハ犯さ直又ハ調護あしくとまをひ
見點延あり又え来え氣よくと痘毒盛ゆして
元氣ハ押あがり一日又ハ半日してまをひなり是等ハ
左重一茶ゆ漸三日のまをびよとろふあり又至て

かろうして一日半日で見あるもの見是れ菜及む

○見點

痘瘡十二日のときびは見点の初の日よりかぞへて
初熱六七日ありても日取の内へ入らざる

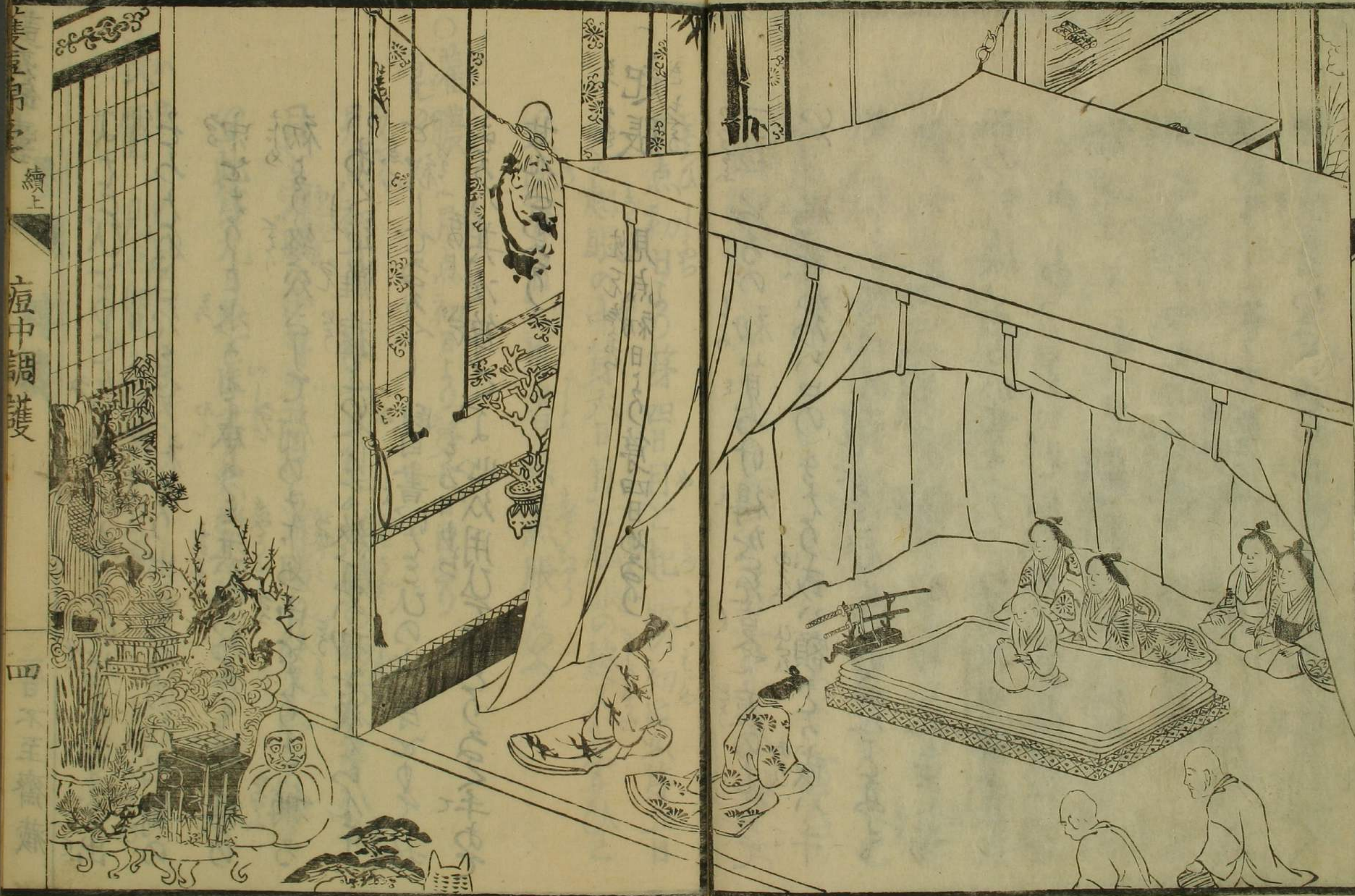
痘の初てある日と見點のたより次と見點の中
三日目と終るといひ又でそろひのたまひと云は三日目と
医書に六出齋といふ按むるは一身のうちいづれでも
初て痘の一粒あると一点血とあらざるといふて是を
見點の初とすといふども是は見附得がた也
いふんとあつては先づ一点血とあるがらふ
とて裸體にしてまのりて居るがらふあらざれば

一粒いづれの初は見つけ得がた也痘のたより
いづる場所かた口のまわり或は額とち或は手
或は足とち場所の前後は凡そけがた也
あらざるて一点血の證はたらくかきて場
所の前後はあらかせよすべし
一点血とあらざる見點は多く出さるる
齋山とよくあつて起脹十分水と持と蒸
脹本膿にかると灌膿十分膿とのつて漿
満かせんと飲して壓面のごく本らるる
むと収斂かきその出来ると結痂と其次穿く

痘疹論

轉機

三



續上

痘中調護

四

よととびとめて名とつくまうるに倍ぬいまで出
 そろとぬさ死るる初より出そろひの初出揃の
 中をとりと水うそ本うそ其外はまも轉機ナトビの
 初より終ふまで何のたどめ中をとりと稱ヒラカる
 いかく追難痘といども終ぬ功と液をらんこと
 と祝し七るるべし醫書にたとびの次第をいそ稱
 まるる其次第くよ心公用ひてのとりるる手あて
 せんこめり

起脹

見点初日より算四日めり

見点初日より算四日目と起脹の初より算五日
 目と起脹の中算六日目と起脹の終又い算五目と
 此六日目と医書よ六蒸脹といふ

灌膿

見点初日より算七日めり

見点初日より算七日目と灌膿の初より算八日
 目と灌膿の中算九日目と灌膿の終又い算五目と
 此算九日めと医書よ漿満といふ

收靨

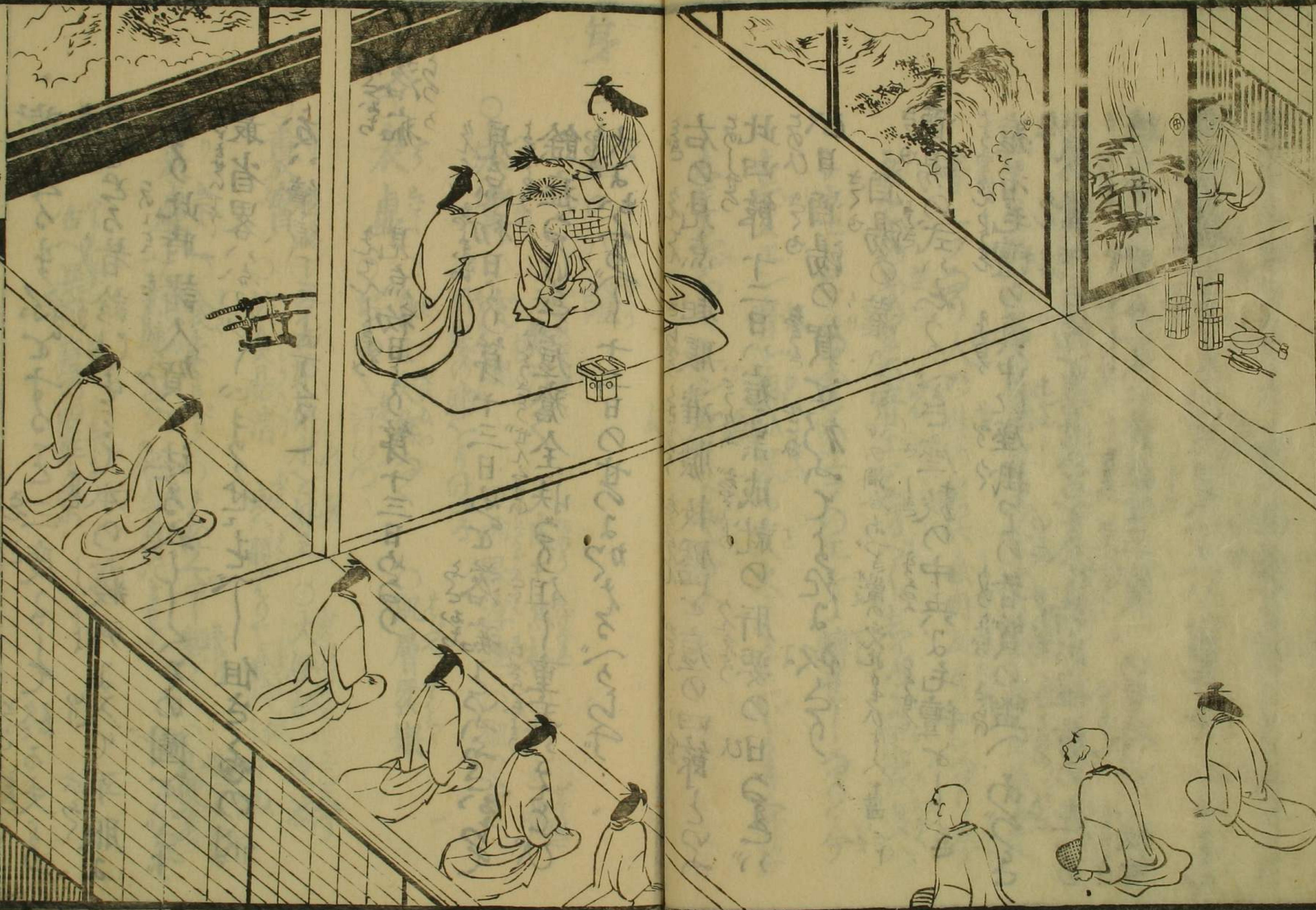
見点初日より算十日めり

見点初日より第十日めと收壓面の初第十一日めと
收壓面の中十二日めと收壓面の終又ハ志をひとす此
十二日目と医書ハ結痂といふ

按ぶるは壓ハ膿の貯へんとく膿のま中なるもの
ごとくしむむるの壓字なるもの時ハ於照反めて
音エフる人の姓のと記ハ余丹反音エンなり今
多くなのきるは音エフるべしとるるハ医家多ハ
シウエンととるるハエフのエンハ轉せしるの今
まどよエン音と用ひ来る支久一ハまどよとせと
まてとららくエン音ハ志とる

右の見点起脹灌膿收壓と痘の四節といふ
此四節十二日ハ痘業成就の肝要の日とすバ
一日酒湯の賀とつてよたは似たり

酒湯の式ハ志とるべき座敷の中央ハ毛種と一
痘者毛種ハ真中に座掛つもの者質の鹽へあづと
鼠の糞酒と湯と合せると入て持出痘者の左りの
後の方へ置今一人ハ袂袋と三寶へのせ持て痘者
の右の後の方よりかごす又一人ハくぬぎととるる
のいりの後の方より鹽の酒湯と志めしよく水ととり



灌^{そく}からるも糸とする^とと三度^{さんど}よしと終^とる^と丈^とより
 七^{しち}とどる者^{もの}診^{しん}ひ^ひま^まきて本^{もと}の寢^{しん}所^{じょ}は入^{いり}て平^{へい}服^{ふく}よ
 たり^たり此時^{このとき}諸^{しよ}人^{にん}質^{しつ}と迷^{まよ}る^る今^{いま}もく^くその圖^ずとて
 最^{さい}省^{しやう}畧^{りやく}ハカ^ハのく^く心^{こころ}まう^{まう}せ^せま^まべ^べ但^たさ^さも^もの^の調^{てう}
 文^{ぶん}ハ續^{つづ}編^{へん}下^げ三^{さん}十^{じゆ}四^し丁^{てい}下^げ也^{なり}

○落^{おち}痂^{あか}

見^{けん}点^{てん}初^{しよ}日^{にち}より第^{だい}十^{じゆ}三^{さん}日^{にち}め^めり

見^{けん}点^{てん}初^{しよ}日^{にち}より第^{だい}十^{じゆ}三^{さん}日^{にち}め^めと落^{おち}痂^{あか}といふ^いふ^ふこ^こら^らし^して
 餘^よ症^{しやう}は^はけ^けは^は瘡^{そう}瘡^{そう}全^{ぜん}快^{かい}なり但^たし^し重^{ちゆう}症^{しやう}ハ^ハた^たと^とび
 大^{だい}よ^よか^から^らる^るべ^べ十二^{じふに}日^{にち}の^の廿^{にじふ}の^のか^から^らる^るべ^べら^らず

身^み二^に痘^{とう}の八^{はち}證^{しやう}

○表^{へう}實^{じつ}

- 大^{だい}熱^{ねつ}汗^{あせ}多^たく
- 皮^{かわ}毛^{もう}焦^こ枯^こ
- 氣^き粗^そ
- 兩^{りやう}眼^{がん}浮^う腫^{しゆ}
- 肌^{かわ}層^{そう}柔^{じゆう}嫩^{にん}
- 風^{ふう}寒^{かん}の^の邪^{じゃ}と^とう^うけ^ける
- の^のしど^{しど}喘^{ぜん}

○表^{へう}虚^{きょ}

- 身^みハ^ハ大^{だい}熱^{ねつ}多^たく
- 肌^{かわ}層^{そう}柔^{じゆう}嫩^{にん}
- ち^ちと^とく^く汗^{あせ}多^たく

○裏^り實^{じつ}

- の^のしど^{しど}か^かじ^じた^た水^{みづ}と^と好^{この}む
- 飲^{いん}食^{じき}易^い消^{しょう}
- 大^{だい}便^{べん}秘^ひ小^{せう}便^{べん}澁^{せき}
- 或^{ある}ハ^ハ腹^{はら}を^をり^りて^て食^{じき}ハ^ハ好^{この}む^む也^{なり}

○裏^り虚^{きょ}

- 食^{じき}は^はま^まず^ず
- 大^{だい}便^{べん}多^たく
- 大^{だい}便^{べん}多^たく
- 食^{じき}ハ^ハ好^{この}む^む也^{なり}
- 小^{せう}便^{べん}清^{せい}

古^こへ^へ是^こハ^ハ痘^{とう}の^の四^し症^{しやう}と^とい^いふ

○毒壅

○根点稠密
○痘色こまえず

痘形不尖
痘皮の下にかさこいぬ

○氣虚

○痘白く山あがず
○元氣勢なく

痘の形むらむら

○血熱

○見点色深紅漸入焦紫
○斑ぐりくとすむらあり

○血虚

○痘色淡根散
○痘の色と地の色と同トきめて分る

痘科鍵此四症と前の四症を合して痘の八證といふ

第三 順險 逆三症

○順證

順證とは訓で痘は無理横らぬるまらぬるる症あり痘の多あふかたらず痘かろうして逆症もあり痘重うして順症あり順症は某と用ふるよあふれば必竟痘は癒は加ふあふた症と順症とあり痘瘡と成就はたんたあり他病は某々服して病と除き退くとさるる

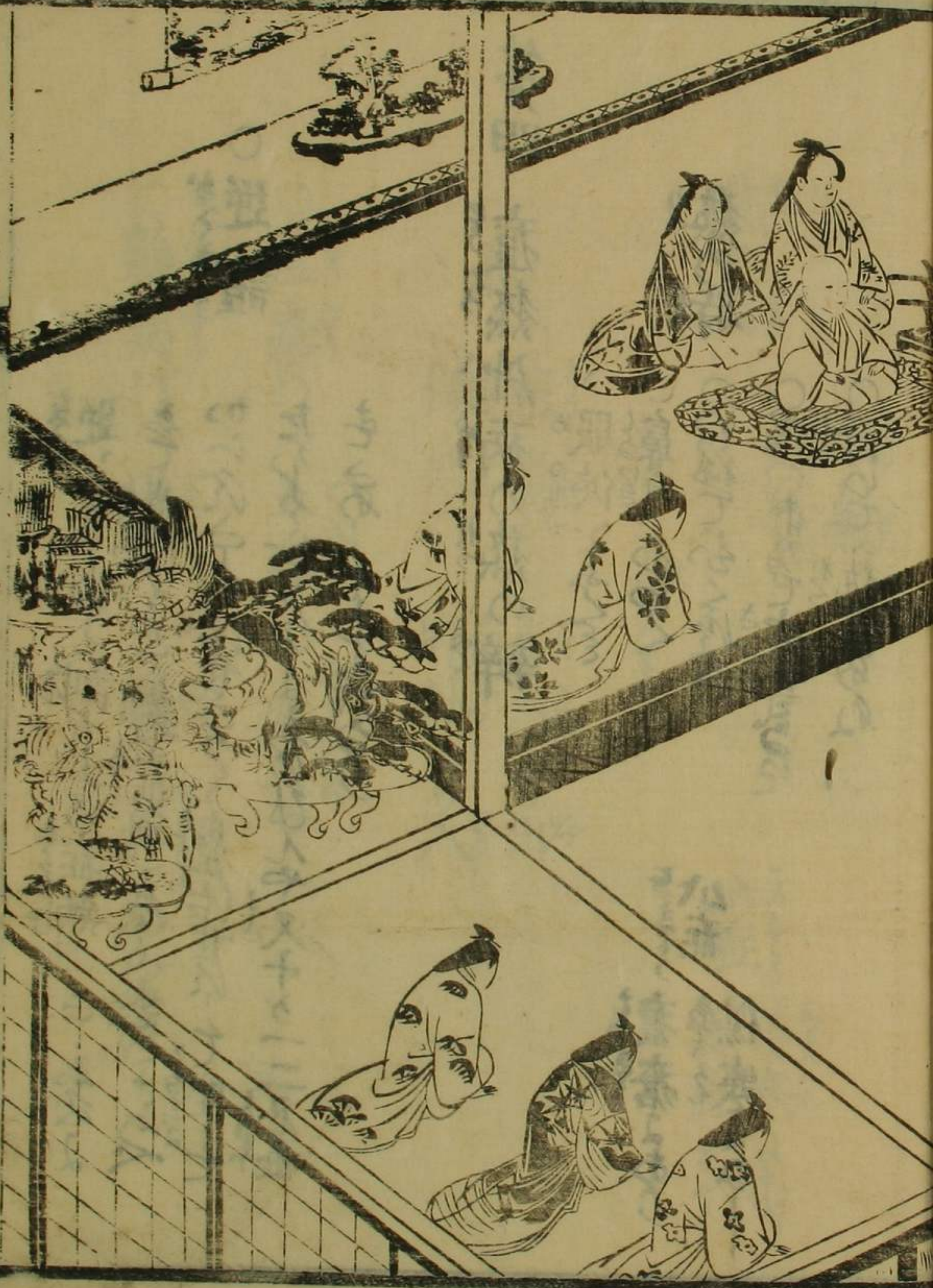
○險證

險證とは訓で山の險阻の甚き險阻の地は案内者つぎは行とあふてさそく痘も險症は某の奏切つぎは痘が成就まらんとあふとさるるて癒治とすよは症あり

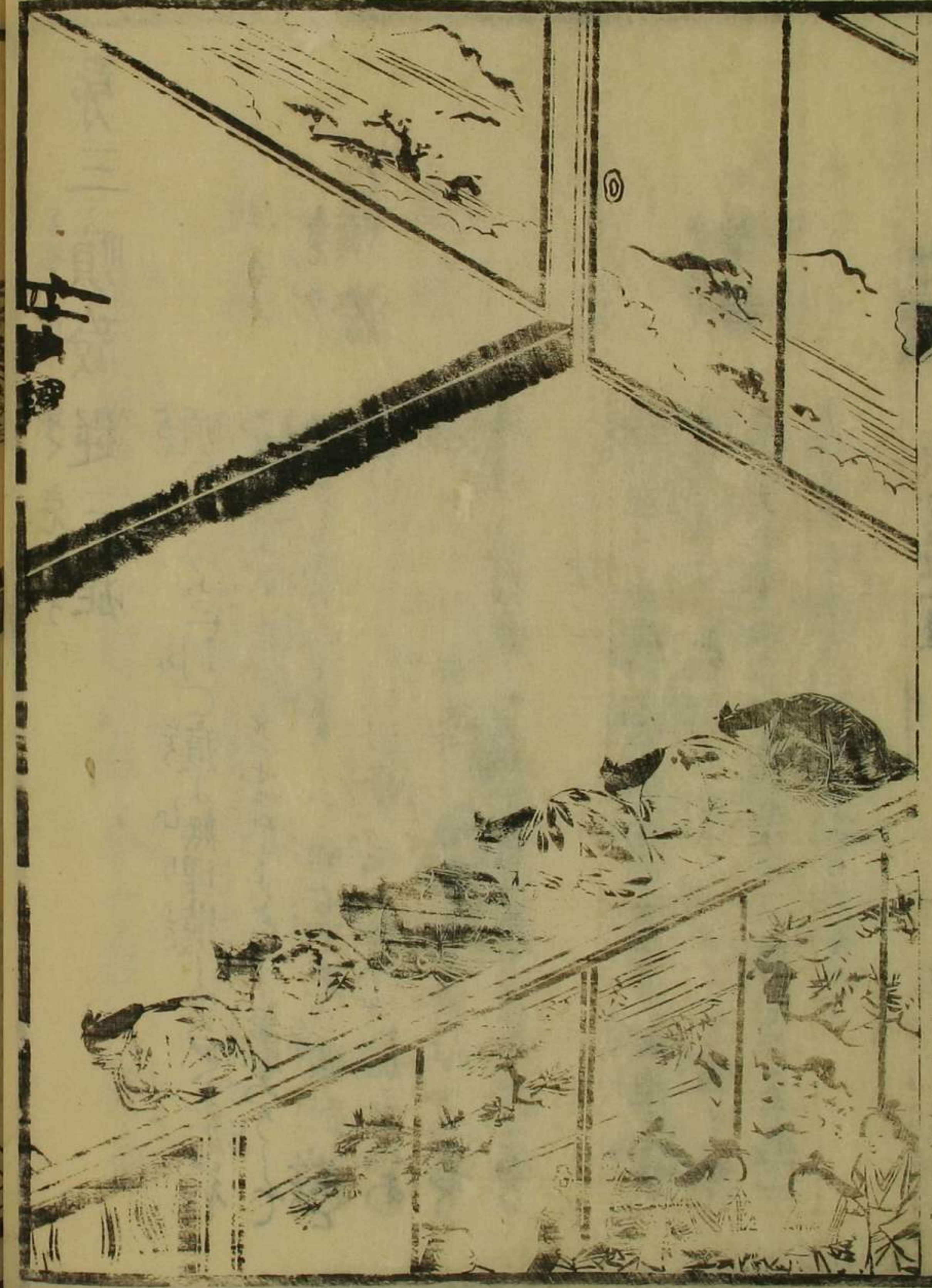
美濃

酒の賀

十



言不至齋藏



言不至齋藏

○逆證

逆證さうぬと訓くその症無さるゝあぬよ
きて療治せよとあぬ症ありて悉くさうぬ
かひて之を治せざるも療治せしめて堅して
たむらんと凡そよ志のびんや又十が一二日
まゝあゝもあむるなり

第四 痘熱他病の熱の辨

熱の時

- 眼決とみま
- 鼻息あわく
- のぼてむく汗
- 汗のわいて寒気
- 汗のわいて熱さぬ

熱の時 痘熱あり
傷寒あり

熱の時

- 寒氣
- 汗のぞむ
- 汗のわいて
- えりて脊とまろ

熱の時 傷寒あり
痘熱あり

但

- 痘瘡ハ 毒内より出
- 傷寒ハ 邪外より入

○痘瘡ハ 五臓の症具る

○雜病ハ 僅一二臓の症とあらん

五臓の症

心
○かゆやう紅き
○びくくびくつく

肺

○声おひ死
○水とらゆる
○せ死
○ふさぬ

肝
○眼あらく又赤らる

脾

○あぐび
○ゆごえろ
○吐から多死
○肚ふらる

腎
○耳の後紅きとぢゆる
○耳ひある
○腎ひある

痘瘡たうそうは右五臓ごぼうの症多具る
他症たしやうは二二三症とあらはす
きうとせしよとらむべからば

第五痘瘡水痘の辨

痘瘡たうそうハ
○面部めんぶより紅きとらる
但熱たつをげく風寒ふうかんを受るうくる所ところとさし先面部せんめんぶにつく

水痘すいとうハ
○手足てあしより面部めんぶより
但熱たつをげく先風寒せんふうかんを受るうくる所ところ呼吸こそくさし手足てあしより出

正痘せいとう
○水みづの終しゆうは出でるのいふをわちりぬむ身みは痘眼たうがんと
よこを膿うみよりする基もとなり

但 痘眼たうがん有あハ正痘せいとう
痘眼たうがん無なハ水痘すいとう
又極虚きやくきよは痘たうの皮かわをすくして針はりの孔あなのごく危あぶい
あくと痘眼たうがんといふものと大おほく異なる

水痘すいとう
○根ねのまへりぬ
○色いろあらく赤あかからば
○膿うみよりするよして痘眼たうがんなり

第六 痘瘡麻疹の辨

痘瘡麻疹の熱
あつたとき

麻疹

- かゝれしきをうあま
- 胞とまじりていり
- 咳くまので
- のんがら
- 熱あつたとき

見点

- 痘瘡ハ 根肉中より有て極めてふ
- 麻疹ハ 皮の内よりかんで肉中より根

痘瘡

- 頭面
- 多き

疹

- 見点
- 大少をうひちて追ひ
- 粒そろふてこまらぬとよし

第七 肌膚の善悪

肌膚

- 明潤光彩
- 乾枯昏滯

凶吉

○地の色白くかた

指とあはさるあか本の紅かた

吉

地のいろこのまゝぬて指のいろをう

指とあはさるくまだすまのなるぬ

凶

指を頬か

あてまら

生色ハ

春の花の露と含が

吉

死色ハ

秋の草の霜と経るが

凶

續上

肌膚

第八 見点部位

面部

○眉以上

後よ見え 善

先よ見え

悪

一身

○面部

先よ見え 善

後よ見え

悪

見点部位配當及面部六十位等ハ細クに論ズルハ相家占考の要ニテ治痘ノ無益ナル者ハ面部ハ口唇の辺より次第ニ額ノあらたむこと吉ト額より下へさるると凶ト面部より手足をもちろぬ吉ト手足より面部へ出ると凶ト手足の枝末後より陽氣の分る頭面と先ハ面部ハ口唇の肉多き所先より額の骨多く肉薄し所後ハ見点たる六十人十人吉なるハ々道理よかるべし彼の配當の微旨の如きは予不才にしてまゐるがため因て配當の説姑く是とあく

第九 痘の形色

形

○丸くうつらうく
○とんがり高く
○かろくうつらうと一

善

○かてくままりよ死
○かてくままりよ死
○かてくままりよ死
○かてくままりよ死

悪

とそむかすので死

○かけぞのいで死

○泡のいで死

○のみくひかひのいで死

○皴のいで死

○たびのいで死

○むらこのいで死

形

最大凶

色

○鮮あざやうろくひ
○あざやのりあつく
○あざやつぎほり
○あざやのりほり

善

○あざやくまけのろ
○あざやのろようま
○あざや色あざやかま
○あざやのろ一色

悪

痘

○あざや紅絹のてん
○あざや水海の絹のてん

あ

第十

唇舌

唇舌 ○うろくひ
唇舌 ○たのり

吉
○白
○赤
○紫
○黒
悪

○かたたまきぐ
○ひぐこま
○ぶち
○霜しものてん

凶

護痘錦囊續編上終

護痘錦囊續編下

目次

熱

驚悸

嘔吐

寒戰咬牙

痛

腰痛

喘促

發毒

熱耳啞

かたたまきぐ
井いひさつける

えんからる

さむけふるひ

かみみ

かみみ

のんどせりくせりつく

地腫ちしむあらず別べつ腫起しむ

かみみ

惡寒

狂

泄瀉

腰痛

喉痛

疥

水瘡

肉腫

さむけ

かたたまきぐ
狂きやうのてん

さむけふるひ

かみみ

かみみ

のんどせり

かみみ

かみみ

肉のたれり

倒靨

膿とゆらかうそ内へ引らむる

黒瘡

焦紫

空倉

膿の全うたうり

臭爛

毒皮層は滯るる

膿水

うきみぐ

害 疔

まてよかせて疔又害を

失血

血と九竅のうり

斑

まじら

水泡

けいつぶあつたのよく数粒
水とふんせひふくまひてまじら

欬嗽

せせ

丹疹

あつたせりのてい

眼

め

虫瘻

又とまうそまうのうちにじ虫と生ずる

口瘡

又走馬牙疳

禁忌

ひまの

藥方

目次終

護痘錦囊續編卷之下

江戸

石塚汶上尹著

證議類聚

熱

初熱

初熱須知

見介

正論の初

升麻葛根湯

○ 痧症の

見点三日のうちに解毒散

或 清涼攻毒飲

○ まてよかせ

常候のあつたてい

清涼攻毒飲

○ まてよかせ

灌膿須知

○ まてよかせ

收膿須知

護痘錦囊

續下

熱 惡寒

一

升麻葛根湯加生
補中益氣湯
升麻葛根湯加黃

温中益氣湯
異功散
聶氏建中湯

寒 聶氏建中湯
熱 大連翹飲
加大黃

毒壅 清解散
肝氣疏肝透毒散
痘未明 導赤散

發散 便秘者下之
痘順者
濟世鎮驚散
如全蝎 姜蚕 天麻
即南極壽星湯
去白附者
南星 防風 蠲退
薄荷 甘草

惡寒

さむけ

又さむけを治すの法あり
此の寒戦文字より

○惡寒

十が八九が
外邪をさむけ

發散すべし

但全虚寒よりさむけするハ温補すべし

又熱毒ありて
惡寒するあり

温補すべし

○大抵前より同じ見点の部と見へ

○惡寒

虚寒より

温補すべし

○惡寒

内攻すべし

但寒戦と大抵同

寒症ありて寒より
熱症ありて熱より
寒熱の症をさむけするは温補すべし

驚悸

おどろきびくつき
井二ひきつひる

○驚馬の四種あり

○毒壅とぞと甚しうして驚馬なるあり

○氣血よりして驚馬なるあり

○平生肝のやみありて驚馬なるあり

○痘とさむけの法あり

○痘のさむけに驚馬なるあり
熱内は驚す 妨る

○痘のさむけのち

氣血虚弱より

○出さむけすべし

驚馬を治すべし

○痘の順あり

是元來驚馬ありて此の痘の熱よりして
驚かざるあり

伏熱 蕪解散
火毒 涼膈散

直指方抑肝散
合保元之類
抑肝散
當歸 白朮 茯苓
釣藤鈎 川芎
柴胡 甘草

內毒盛外為風寒
所束驚搐者
蕪解散

毒壅不能發于外
而驚搐者

清解散

氣血怯弱不能送
毒於外而驚搐者
温中益氣湯

○痘色よりぬい 毒はよきなりて重

○伏しう終つあまが 毒のよきなりて重
○火どくあまが 毒のよきなりて重
○火どくあまが 毒のよきなりて重

○本らるるの時 脾の臓弱し肝の臓を制するにあらず

脾と肺との二臓よりとも補ふべし驚

○痘不成して驚發 凶

○かせして後發す 死不治

多くはうらみのみこころによりて毒内攻す

○ふらふらあまが紅して驚發す 非發散すべし

是は外風寒と毒の内餘毒と相うつり

○驚一たび發して死するあり 毒内よりつゝ外

是は初熱のときうらみと或は狂気のときさして

て母まらぬは心のろろとろろさへせぬて

熱うらみやとろろなり外悪氣よあり内外

相應して毒からしむるなり

かきねてろろさへすまが 愈べし

り舌よ苔あまが 愈べし

狂 脾胃の屬ま

くはひささして死て

狂氣のときさ

○初熱のうらみ

見えぬまへ

頃

湯明散餅
升麻葛根湯

十神解毒湯

加大黃

甚 涼膈散

托裏清熱

人參 黃連 升麻

涼膈散

嘔吐無他症

二陳湯

小半夏加茯苓湯

升麻葛根湯

脾虛

參砂和胃散

清熱解毒

清表散毒湯

補胃

平胃散

六君子 之類

風寒及食傷

升消平胃散

○見えてやまぬ
経門ごとく脾胃より伏す

ひあの鬱と
チロキんすべ

○出るところひて
止すぬ

痘美して

題ひあの本熱なり

熱とさるゝ胃中を
すらすべ

○本うその際

でののくいろあし記

是を熱毒解すぞく脾胃より伏す

○のせ後 毒外よりすず

多ハ凶

嘔吐とれたから多てたなり

○初熱のうち

はまごころんえぬうち

但痘とちろキんすべしをたすとむべしす

ぞく肉より出て出す

○でところふてやまぬ

○胃の氣虚すまば

脾胃とこのち

○秘のちのけいれが

秘つとまきす

○寒薬を用すまば

胃の氣を補ふ

○傷寒あてまなく

あつと

泄瀉

をらごころなり

脾は属す

毒脾より壅して上へ炭するトあてまきす

志の秘つ下へものなりあて初よて

いすぬちろキんすべし下へ解するゆゑ是を分
消の美とせよとす

升麻葛根湯

四苓散

五苓散

理中湯

茯苓調脾散

白朮 白扁 茯苓

砂人 薄荷 厚朴

大東 瑛 或加人參

保元湯 理中湯

合言

異功散 建中湯

尿黃 真穢 尿赤 淡

痘 紅紫

加味 四苓散

尿青 白屑 利

痘 淡白 虛寒

參朮散

虛消 不止

七味 黃芩 丸

脾胃 清熱

惺々散

調胃 養氣湯

涼膈散

保元湯 或加附

木香散

異功散

○初熱

見えぬまゝ

毒下(解)を吉

但ちつぎんすべし 止むべからず

○でそろふて守る

内へおちのりて守る

急は止むべからず 早く引くべし

○本

くらみの中氣 落入て

とらふ

氣血もちりさるる

凶

温補し くらみのとらふ 山をさす

○山もひらす

根の血もちらぬ

さまじく

○山もひらす

内攻

必死す

○痘はかえらす

食傷

吐酸く臭ととらふ

食を消し みちびくべし

寒戦咬牙

さむけふるひ 牙

○初熱

熱はゆるる

さるきすべし

○でそろふて守る

寒戦交牙す

脾胃の熱を解す

○脾胃の火熱

たりの寒よりとらふすべからず

○本らうそのと死

○痘白くつやるき

虚寒 大は温補すべ

○膿をのりぬ

脾胃虚 凶

○かせご

右同 凶

なれ死志り

七日以前熱は属す

○寒戦

脾胃の熱を
心臓の火の旺盛
脾の臓を熏すべし
脾の毛の穴をさすり氣の流れるなり
脾胃の熱を
脾胃の熱を
脾胃の熱を

○七日以後

○寒戦

陰血凝て
陽分虚し
氣虚
大い多量を用
桂枝湯を主
平陽分を温む
大い多量を用
桂枝湯を主
平陽分を温む

○咬牙

陽氣血道に入る
血虚
大い多量を用
桂枝湯を主
平陽分を温む

癍 かもみ 虚 又実は属するなり

○痘灰白あり 氣虚 内を補痘をならすべし

○痘毒さうんして 火熱いさきまぬ 火熱をさますべし

○うきよめちつるを 補ふなり かもみ出る 少く清涼を用

○皮うすく 膿うすくきつて死 毒化せざるなり 虚

○血ちり 痒甚をひて死 死

○痒どころ かき中より膿血うる死 死

温中益氣湯
千金内托散
多岐鹿茸湯
十神解毒湯
黃連解毒湯
涼膈散
冬麥上補湯

内托類
木香散
異功散

活幼平和湯

錢氏白朮散

加防風白芷

不可太過損瀆

膿之機

保元湯加山查木香

膿色已滿痛楚則

四苓散利之

升麻葛根湯

火毒

清熱解毒湯

便秘

調胃承氣湯

大熱

涼膈散

升麻葛根湯

風寒 應服生麻

食傷 平胃散

或用大黃

去積 椒梅丸

○痘の内虫^ハ死^レてか^レる^ニ 虫^ヲ取^リ去^ルハ 此痘死^セず

○邪氣又ハ穢^カ氣^ニよ^リる^ニ 邪毒^ヲ犯^スる^ニ

○まづうみのとき 氣不足^ニあ^リる^ニ

○痘美^シか^レてか^レる^ニ 常候^トも有^ルベ^シき^ニ

痛^ク 常候^トも有^ルベ^シき^ニ

○痘^ノい^ひむ なる^ニ 痘^ノと^モい^ひむ^ニ 地^ヲた^リり^しむ^ニ 痘^ノ勢^ハい^ひむ^ニ

○地^ノい^ひむ 地^ヲた^リり^しむ^ニ 氣^ノ滯^リあ^リ 小水^ヲ通^スべ^シ

○痛^クなる^ニ 常候^トも有^ルベ^シき^ニ

○微痛^ク 常候^トも有^ルベ^シき^ニ

腰痛

な^らい^む重^シ 毒脾^ノ饑^ス

○初熱 痘^ノと^モう^すべ^シ

○火毒^ノよ^リる^ニ 大毒^ヲ解^スべ^シ

○大便秘^スる^ニ 大熱^ヲ退^スべ^シ

○痘色^ノい^ひむ 凶^ニ 毒脾^ノ胃^ノも^ちら^のり^てを^うせ^ず

○痘色^ノよ^りる^ニ 腹痛^ノ三^種あり

○風寒^ノよ^りる^ニ 食傷^ノよ^りる^ニ 元来^ノ虫積^{あり}

○元来^ノ虫積^{あり}

腰痛 腰痛 喉痛

七

升麻葛根湯

痘色順

仲景当飯四逆
加兵菜防風蒼朮

咽喉痛通藥

消毒飲
甘吉湯
加牛房子

腰痛

腰痛のしるみ 瘧疾のしるみ
瘧疾のしるみは多くあるは下へ落ちて
腎の臓とあるは多くあるは火熱のたつ
ぶらさるるは腎水が少なるなり

初熱

急な氣を引く

いそろひあてぬ

痘色順ふて内症の死

痘色順ふて大熱さるぬ

腰痛とあるは
老の氣とあるは
多山痘下陷なり

喉痛

のんどむ

初熱

肌膚ひらひらする由
肺の表へはまきりて
氣道よどむはむす

とろきすべし

咽喉痛甚

甘吉湯加牛

のんどむのど死

のんどむの内中も痘あるは外の瘡とあるはく
せらるる多しむすかせらるるのづらひも
ア

喘促

のんどせりくせりつく

初熱

風寒の邪は表とせられ
毒氣のむすはるるなり

とろきすべし

いそろひ

たん火盛なり

痰火を消すべし

いそろひのど死

脾虚は属す

内と補ひ元氣をたす
たんとまきむ

痘色あらく

毒内はせむ

悪候

うみせりぬ

注癰瘡

かせ後の瘡肉中に
落合と痛忍べら
ず

是は瘡毒に化集
まて肌肉に停住
す極て重

治法毒とを解
毒と火外ハ象牙
膏と以て是と貼す

四聖膏

珍珠 碗豆 俱焼
乱髪 三灰 氷片 羊分
用油胭脂調成膏

疔

その疔は玉に似たりも多し疔の疔ハ猶釘といふ
がごとし毒肉の中へ入るとおこりて深く入り
入りてとまるといふも多し其の毒を治すに
かみ或ハ空あるとさういふものこの色黒く
あて肉中深くゆらぬ疔はあつちまの疔毒ハ
火熱解さるより成る

疔ハ

疔ハ針と打中り血といふてあつち
あつちり四聖膏と死のうも入る

瘡来熱つりか死つて膿といふ
大悪症は変せんとするま疔敷点とす

吉

此疔より膿水といふて重と変て瘡とす

○面部胸(発する凶)

發毒

地腫よあらず別腫起

○見点のともころ

でころひあてち 軽

○でころあてちらぬ

瘡毒と名づく 凶

是ハ肌の内より解さるる瘡瘡かちらず
とごころり又氣血毒は飯して瘡は飯せざる
かきわてころきん并解毒す

○やんころの死 凶

○元氣実

内攻す

骨のあつち毒とちころハ

先甲に生を得

治方補して毒とをら解毒とかな

○胸顔(発する 凶)

○瘡中(ひく 凶)

○膿のぬ 凶

發毒水給

九

續

食道日咽在後
氣道日喉在前

水噎 みせが

飲ものれむせがハ火毒のしどろまきうりてのみもの
とうけずさてまこのしどろまきうりてのみもの
ありのみくひハ食道へ入りの氣道ハ呼吸の通路
より今食道ハ毒ふきかきりてのみものしどろま
ゆゑあまこハ氣道へ入るとのしどろまきうりてのみもの
よりのあまこ出す息あておしどろまきうりてのみもの
食物の通るハおしどろまきうりておしどろまきうり

初熱のしどろ

毒の氣道ハまきうりて
まろまきうりて

○むせがハまきうり

毒深重

升麻葛根湯

善治者當視其毒
盛之痘於咽喉乾
燥之先而

用 甘吉湯
消毒飲上

加麥杏牛蒡
之類以清氣道

如是則有毒化而
自能免患

見点之初
用清涼解毒

○七日以前

○痘 紅紫

水噎

火熱のむりて
毒のしどろまきうり

○痘

白 水噎

氣血虚弱
肺胃のむりて

○六日以後

○痘 重

火熱肌をむりて
火熱くさうりて腎水へる

○痘 重

○腰 凶

火熱くさうりて腎水へる

○かんじみSaku

氣道ハ痘ありて膿をのむらうりてのみもの
かせいこうじみSakuのむりて

聲啞

こまへいせむしりひん

熱毒上へのりり痰を生じ痰氣道よこり
浮るる声啞するなり

初熱

痘ハ五臟よりづるもの由糸皮毛ひらざれば
痘毒内より一その種の火のこく皮毛火
毒とくくる由糸そのつらさうとこりの肺の
臟とくまますりて肺の臟の持まへん声
つらさうて啞のこくひん

こまへいせむしりひん

声啞

毒熱盛肺と刺す

重

麥門石膏之類

本うそのとれ 声啞

肺道は痘あり氣道とささぐり多声つら

本うそのとれ

声ひん

氣虚ハ

常候とて有る容体
肺氣と補ふ

温藥を服しまごりて声啞す

肺熱とよまますべし

肉腫

痘の腫るにあらず肉のたれらるなり

肉腫と世上あて死症といふとも陽明胃
の腑に熱ありたり麻黄葛根湯を
用ふべし

倒壓

膿とらちかろし内へ引とむる
おろくろ氣虚して毒引とむる

膿とむる

是倒壓よりらんとす
温補内托すべ

○血ちらすままりて死

根暈

氣血とひさる薬及をば

○風寒外よりむる

風寒を温散す

黒陷

黒ハ火毒より陷ハ氣虚より

根暈

血のまご紅活 急清熱清補す
不治

寒熱の辨

熱○始痘赤すなるハ 黒して焦る
寒○始痘つやろく白ハ 黒してころ

風寒外よりむる

外邪を温さすべ

焦紫

血熱

熱と清血と養べ

虚陽外に浮んで焦紫ハ

反温補すべ

根暈血ちる

不治

皮薄漿清

膿ハ濃皮ハ厚を貴

こまら痘毒いまご皮膚へうつることあり
ざるもあつる

治 補ひて 内より 毒を化す

或ハ腫毒を毒とす
或ハ代毒を毒とす
是れ代毒を毒とす

○内症 重者 凶わく 後には下る

○氣虚膿 毒と化す 内より毒を化す

○一腫 毒と化す 脾胃と補ひ小便と通す

○八九日あて 内攻より 死

空倉 膿の全るなり

○本来と氣血まどらふ 痘毒化せざるなり 多死症

○内症 食すめば

毒肌肉は滯りて皮の表へりて毒を化す
元氣十分のみちなきがらるゆゑ毒内へ入ること
あはれず
温補して毒を化す又發散と兼れば
愈へり内症重ハ死す

爛

○痘数粒一毒にたり 重
のみりの多し
濕氣皮層は

○たゞてがせず 不死
その色うすの色 又膿と化す

○たゞて 痛堪べからず
毒を食ひ 毒と解す
熱うちたうするゆゑ

用白朮茯苓白芷
防風之類
去濕滲水
補脾滲濕
汪氏解毒飲加苓

養毒用藥 續

爛 臭爛 臭

敷藥

滑石末
敗草散
珍珠末
象牙末
蕎麥末
之類

爛成膿水不乾

滑石末
敗草
珍珠末
象牙末
蕎麥末
敷之

○たぐまて
濃水かじらぬ
かひ薬すべし
その粉を

臭爛

毒皮層は滯る

○うらみみくす

あやふし

○毒化せぬ

内症やうくえ氣実すまがう

○爛臭

此ニ他症ありむところ痘毒の宜とす

吉の故ハ

臭爛外はあり
痘毒内はあらざるゆゑなり

臭

うまぐさこけりなり

○臭と計一字稱する外臭あり

○口臭と口字を加へると胃中の臭れなり

○痘のふらひ人とうくやど臭ハ 胃中の臭れなり

○初ハ うの移つとさるるさるるなり

○かせのと死ハ

○少くくさみハ 常候有べき症 吉

○全白ひ無きハ 餘毒ありとす

○痘重うして全白ひるハ 餘毒あり

○口中なるる臭ハ 口疳といふ症あり 患べし

走馬牙疳といふは口中をり 齒落て死

膿水

うらみみく

○痘のふらひことしくくのぞす

膿水のぞくかうらぬ 真氣ののり

こと真氣をのらす せせぐべし

搽滑石末防濃真氣
或真綠豆粉亦可

害 疤

よとでよかして疤又害と

こま一いつうそみずずぐくしやごうくく
化せずして毒皮層のあひまよとまうく
治法 補ひ養ひまくすとく解毒とくま

失血

血と九穴敷よりいす

最悪候

痘の功とすかろらす氣血とゆつてす
血ハすうのち形の有ゆのゆ多一旦ゆと
不足すまの急補ひたせぬゆの志
に血すまよ不足するゆ多と氣のゆこれ
べごことろろるゆ多、痘膿と成就する
とあごをさるるゆ

血

血むどまじつとゆらる

凶

こま毒内は高より血せまうてみづゆらる

痘

痘の色かまらず

かまらず

紅くつやある

鼻血

鼻血ハ とうまんのとろあり

吉兆

鼻血のゆ

○ 餘の穴より血出る

凶

○ 赤より出る

凶

斑

陽明は属す

痘の色と合せかまらず

斑

紅明

紫

青藍

輕

重

死

升麻葛根湯
十神解毒湯
加大黃

○ 舌の紅み

陽明の鬱熱

ころきんす

○ 見点
起脹

陽明の本熱

熱をききす
便秘いんす

○ 内大便秘せず
外鬱滯うま

熱陰を扇ぎ

血をけりて
斑しころる

○ 痘赤紫

血熱

けりねのきまき

○ 唇紅れ

胃中たぎころる

凶

○ 本紅

温補十ぐ

虚火のころころ

○ 斑の一症ハ

散散とせまが熱毒を解さぬ
ぬけころる来ころる

水泡

けしつぷあをわつぷのどく数粒
水とあそんでひぶるまのどくまのどく

又るいなるまの

氣あまよりあり血ハ不足より生ず
おとと痘疹毒さるんよ火さるるど死
火穴上へあがるよあこをす水ハ下へく
よあこをす皮膚の間よあこ合てその
餘勢湧上つ水泡とるる

○ 泡点あきころる

吉

○ 伊けのど死

重清火毒

又脾胃虚弱ゆへ水と制するよあこを
さるる水皮膚の間よ溢て水泡とるる
○ 本紅のど死
氣血と温補す

四君子湯合参芪飲
加防風白芷

續下

水泡 欬嗽

四聖膏

泡

- 白
- 自而清水
- 紅紫

氣虛
氣實
血熱

○白泡

もあつづのど死

つまぢりあし
くすりを入るべし

嗽

せ死

- 熱毒あまくと盛んよしと散散するところあり
- 津液かひあまきこるあり
- 痰 肺の穢の宛とあまきで
- 痰 津液かひあまきこるあり
- 痰 津液かひあまきこるあり
- 痰 津液かひあまきこるあり
- せりくせりつ
- せりくせりつ
- せりくせりつ
- のんどの中に鋸ひまのどく声ある

肺をうる不至

乳食湯水口よ入をせ死のどす
右五々条と表氣をささり津液かひ
あしく痰生し正氣をささり胸膈よあま
かる皆毒と氣肺胃の積るあり

丹疹

あつぎほせりのど死の

あつぎ脾は属してかまて皮膚層の間よ
有つあつひのくままりと赤して
むら雲のどしあつぎ手足身脊の上よ
あつぎのど死かあつぎあつぎあつぎ
るくあつぎは属す

○痘丹疹と交む

治さずして愈

蛆瘡 あぶら

又とまうとまうのうちにじし虫と生ずる

青蠟臭氣とたきみ

膿のしをとりとすの卵と取りつけ
長くと蛆とつらと蛆瘡とよ

蛆と追ふ法

内ハ 清涼解毒のくすりを服用
外ハ 丝瓜葉の汁とすり

但 あぶらとたきみと取りつけ
蛆のつらと出

又厚うして蛆のつら

銀の針をゆいしと取りつけ

ごまのあぶらとわくとすりつけ
蛆あぶらのゆいしとすりつけ

口疳

又走馬牙疳

胃熱のうすさ

かきついでき

唇とすりして歯とわら

とらとすりして歯とわら

かみのまん中をすりしてすり

口のま

口のまより白きかきと生ずる
紅くももくもも

唇舌腫て石の下
歯とまき黒くたき

かきついでき
かきついでき

白鼻とつら

死

涼血攻毒飲
涼膈散
甘露飲
王鑰匙
金不换
之類

續下

口疳

十九

禁忌のしるし

○あきと氣とくぐり

○腋下狐氣 ○大便小便の白

○婦人經行の氣

○諸瘡の臭氣 ○蚊のりの氣

○髪のを焦る白

○魚と焼白 ○はげとらふの白

○酪酢葷氣

○麝香の白 ○すく白とくぐり

○さくまき豆

○さくまき豆往來する ○さくまきのさく ○さくまきのさく

○病の前をくぐり ○病の前を掻 ○病の前を掻 ○病の前を掻

○かきまきくぐり ○かきまきくぐり ○かきまきくぐり ○かきまきくぐり

○風寒のむくぐり

○衣類ハ

○五日以前ハ常の通をより見点は一日より五日迄

○五日以後ハぐんぐんあきまきくぐり

○外來穢不淨と避方

○ゆるく穢不淨とよける

○産婦房中經水の穢

○あきまきくぐり

○あきまきくぐり

○雨或ハ濕氣ハ

○喪者のけがれ

○疫癘傷寒のるハ

○糞土のあきまき

- 赤豆とく
- 大棗とく
- 生姜とく
- 楓鉢とく
- 葛花茵陳とく
- 蒼朮楓鉢とく
- 蒼朮あきとく
- 赤小豆とく
- 赤小豆とく

禁忌

二十一

○食物禁忌

○糯米 かなづるのむ 実熱の症瘕よりよけれ初忌

○酒 九日十日のむ 百日のむ 実熱の症よりよけれ初忌

○白酒 十日のむ 百日のむ 実熱の症よりよけれ初忌

○醴 始終より多く飲むべからず 多死のつ

○酸 百日のむ

○胡麻 赤悉く落る忌 瘕より瘕中用るにあり

○あじまこ 豌豆 五日より十二日迄與へべからず

○芋 眼病餘毒うきみの三七日の後より

○筒蒿 多く食さず 六日より十日迄與へべからず

○鶏兒菜 血と母より氣とてす初より十二日迄忌

○蕪菜 十五日のむ

○うめがら 同

○白椽 百日のむ

○えんぶ 十二日のむ

○蚕豆 眉兒豆

○刀豆 五加苗

○葡萄 慈葫

○石草 麩

○うろこ 十五日の後ちひき死

禁忌

○ふらふ

あー

○泥鰌どろこ

十五日ののち後

○鯿うなぎ

十五日ののち後

○たら

十五日ののち後

○魁蛤あひがひ

十二日ののち後

○蚊蛤あまぐり

十五日ののち後

○のりこ又きんこ

○かさ

○沙魚せうぎょ

○わびろ

○かぶら

○もうと

○おとび

始終しじうのもの物もの

至いたてからのち後のち日ひのち百ひゃく日にち
そののち酢す酸さんのちはら醫い者しやはら同どうべい

○あから死しのもの

○志しから死しのもの

○焼酒やうしゆ

○酒しゆのあず

○きんり

○たうらず

○せんまる

○こらび

○わらきんごう

○ふらり

○ひのねぎ

○らのちのち

○みよく

○たらがらら

○胡椒こし

○鮭さけのこを

○香魚かうぎょ

○鯿うなぎ

○鱈たら残のち魚ぎょ

○鱈たらすぎ

○鱈たらがらら

- 撥尾ひら
- 文鯨魚ぶんきんぎょ
- 青魚あじ
- 梭魚さし
- 鱈魚たら
- 馬鮫まじら
- 海鱈うなぎ
- 鯖親さば
- 竟魚あじ
- 烏賊魚いか
- 鰻魚うなぎ
- 鰻魚うなぎ
- 鮎魚あせ
- 鮎魚あせ
- 鱒魚ます
- 竹莢魚たけがし
- 牛尾魚うしお
- 白刀魚しろやま
- 住蕪魚すま
- 繁魚あら
- 田贏たか
- 西施古さいしこ
- 拳螺せんら
- 玉珧たまご
- 蛤蜊かき
- 鴈かり
- 家鴨あひる
- 雉きと
- 青鵝あざな

護痘錦囊藥方

編内所載藥方其下主治既具不再贅其所不載者今具于茲

初熱

升麻根湯 又曰升麻湯

升麻 葛根 芍藥 甘草

加減益氣湯

黃芪 人參 甘草 當歸 川芎 白朮 陳皮 升麻 桔梗 姜煎

荊防敗毒散

獨活 羌活 柴胡 前胡 枳殼 桔梗 川芎 荊芥 茯苓 防風 連翹 甘草 金花銀薄荷

清解散

防風 荊芥 蟬退 桔梗 川芎 前胡 葛根 升麻 連翹 黃連 黃芩 紫蘇 木通 牛房孛 山梔 甘草 姜煎

温中益氣湯

人參 白朮 黃芪 當歸 茯苓 甘草 川芎 白芷 防風 木香 桂枝 山查 姜煎

護痘錦囊 續下

藥方

二十三

疏肝透毒散

強蚕 蟬退 薄荷 釣藤 青皮 木通
前胡 山查 羌活 荊芥 燈心草 姜煎

導赤散

木通 地黃 燈心 煎服辰砂末送下可或加蟬退牛房子
防風 薄荷

涼膈散

連翹 山梔子 大黃 薄荷
黃芩 芒硝 甘草
水送入竹葉七片蜜少
許煎七分食後溫服

甘桔湯

甘草 桔梗
一方加參荊芥牛房子麥門山查根

涼血攻毒飲

大黃 荊芥 木通 牛房子 牡丹皮 紫根
芍藥 葛根 蟬退 青皮 紅花 地黃
如燈心分煎服如失血甚者大黃為君加桃仁每劑和桑葉汁日服三次劑

清涼攻毒飲

石膏 黃連 大黃 木通 紅花 荊芥
牛房 犀角 丹皮 青皮 地黃 紫花地 燈心水煎

當歸補血湯

黃芪 當飯

加味升麻葛根湯

葛根 升麻 芍藥 甘草 桔梗
防風 蘇葉 川芎 山查 牛房
姜煎熱服取汗

加味參蘇飲

人參 蘇葉 川芎 桔梗 前胡 陳皮
甘草 茯苓 半夏 牛房 山查 葛根

麻黃解表湯

麻黃 升麻 羌活 葛根 防風
荊芥 蟬退 牛房 桔梗 甘草
水煎入燒人糞同服

射干鼠粘子湯

牛房 甘草
升麻 射干

參麥清補湯

人參 麥門 葛根 黃芪 前胡 牛房 甘草
炙甘 芍藥 酒炒芍藥 當飯 紅花 川芎
地黃 桔梗 山查 生姜片龍眼肉三個同煎

見点

續下

藥方

二十四

和鮮湯

升麻 芍藥 葛根 人參 姜煎
川芎 防風 羌活 甘草

加減升麻湯

升麻 葛根 芍藥 甘草 前胡 姜蔥水煎
紫蘇 當歸 連翹 桔梗

十神解毒湯

當歸 川芎 地黃 紅花 丹皮 燈心水煎
連翹 芍藥 桔梗 木通 大腹皮

清毒活血湯

紫草 當歸 前胡 牛房 木通 連翹 地黃
芍藥 桔梗 黃芩 黃連 甘草 山查 人參
黃芪 姜煎煩渴者去參芪加麥門天花粉

固陽散火湯

人參 黃芪 當歸 升麻 葛根 連翹
防風 地黃 木通 荊芥 甘草

人參飯芪湯

黃芪 人參 甘草 當歸 川芎
桂枝 山查 紅花 白朮 姜煎氣滯者少加木香

十全大補湯

當歸 川芎 芍藥 地黃 人參 姜煎水煎
白朮 茯苓 甘草 黃芪 肉桂

大保元湯

黃芪 人參 甘草
桂枝 白朮 川芎 姜煎水煎氣滯者加木香山查
去桂不食者加人乳半鍾

木香散

桂枝 青皮 木香 人參 腹皮 茯苓 姜煎
前胡 半夏 丁子 甘草 訶子

異功散

木香 肉桂 當歸 人參 白朮 陳皮 姜煎
厚朴 丁子 茯苓 肉菓 熟附子 半夏

神效散

又見味神散
黃芪 人參 芍藥 紫草 地黃 紅花
前胡 牛房 甘草 熱甚者去參芪加芍連
有驚搐者加蟬退

續下

藥方

二十五

四聖膏

珍珠五 豌豆燒 髮灰各
雄黃八 紫草半 冰片三
細末油脂調刷破疔頭點之

清熱解毒湯

荊芥 紅花 蟬退 木通 牛房 丹皮 青皮
地黃 山查 滑石 前胡 黃連 紫花地 知心

四物湯

當歸 芍藥 地黃 川芎

保元湯

人參 黃芪 甘草 姜煎

千金內托散

人參 當歸 黃芪 芍藥 川芎 桂枝
炙甘 山查 木香 甘草 白芷 厚朴
姜片龍眼肉三箇入好酒和服又參芪內托散此方中去山查
生姜龍眼加桔梗

奪命五毒丹

蟾蜍少 牛黃分 硃砂分
雄黃分 冰片分
用猪尾與薄荷湯下
火毒攻衝心者有神功

辰砂益元散

滑石 甘草 辰砂 末服

桂枝葛根湯

葛根 桂枝 芍藥
升麻 防風 甘草
加生姜淡豆豉煎服寒月加麻黃

錢氏白朮散

人參 白朮 茯苓 木香
霍香 葛根 甘草

潔古白花蛇散

白花蛇二兩炙
丁子三十粒
細末以酒熱服 熱毒者忌之

內托散

千金內托散參芪內托散之類詳千金內托散

安神丸

當歸 黃連 茯苓 麥門
甘草各半 辰砂二兩 龍腦二分半
細末湯浸蒸餅積猪心搗勻如黍米大每服十九燈湯下

回陽返本湯

人參 黃芪 鹿茸 當飯 川芎
肉桂 甘草 山查 熟附子 大棗
水煎

建中湯

又云聶氏建中湯

人參 黃芪 白朮 當飯 川芎
附子 乾姜 肉桂 炙甘 丁子
姜煎

七味豆蔻丸

木香 縮砂 烏梅 赤石脂 白礬各七錢
訶子 龍骨 肉豆蔻 各五錢半 糊丸

一粒金丹

膻肭臍 二雅片 冰片 二
麝香 一原蚕蛾 糊丸 金箔為衣

參茸鹿茸湯

鹿茸 黃芪 當飯
人參 炙甘
右姜龍眼肉同煎去滓入好酒二盃溫服

白龍膏

用乾牛糞久在風露中者火煨成灰取中心白者為末薄絹囊裹於瘡上撲之

四君子湯

人參 白朮
茯苓 甘草

忍冬解毒湯

金銀花 貝母 菊花 荊芥 牛房
紅花 甘草 木通 連翹 紫花地丁
加胡挑煎服

大連翹飲

連翹 牛房 柴胡 芍藥 防風 木通 當飯
車前 荊芥 黃芩 山拖 滑石 甘草 蟬退

保嬰百補湯

當飯 地黃 白朮 人參
茯苓 山藥 甘草 芍藥
煎

除濕湯

羌活 蒼朮 防風 芍藥 猪苓
澤瀉 白朮 甘草 桂枝

收醫

灌膿

汪氏解毒飲

當飯 芍藥 人參 山查 黃芪
荊芥 牛房 防風 炙甘

利咽解毒湯

山查 麥冬 玄參 桔梗
牛房 防風 甘草 姜煎

四順清涼

當飯 芍藥
大黃 甘草

生肌散

黃連 黃柏 五倍子
地骨皮 甘草 細末搽之

補中益氣湯

人參 黃芪 當飯 柴胡
升麻 白朮 甘草 陳皮
湯加麥冬五味水煎

調元解毒湯

當飯 川芎 芍藥 白朮 茯苓
甘草 桔梗 連翹 木通 山藥 姜煎

甘露飲

麥門 天門 天花粉 茵陳 生地 熟地
枳殼 枇杷葉 石斛 黃芩 甘草

金不換

走馬疳吹藥
人中白 枯礬 各三錢 鹽梅 七個 煨存性
五倍子 白礬 各一錢 胡黃連 各一錢 和胭脂水塗之 亦可
雄黃 銅錄 各五錢 和吹之

靈棗丹

走馬牙疳一切疳
小青蝦蟆 不拘多少 生礬 五錢
黑棗 十枚 去核 共搗爛 塩泥 封固 煨存性 爲細末 敷之

涼肝明目散

又云涼肝散
當飯 川芎 柴胡 龍膽
黃連 防風 蜜蒙花

風捲雲

夜明砂 蟬退
蜜蒙花 谷精草 各五錢
共末 每用一錢 用豬肝 兩 披開 擦
藥在內 約定水 煮連湯 用之

釣藤湯

陳皮 釣藤 牛膽南星
天麻 姜蚕 人參 燈心 煎 臨服時 加牛黃 真珠
遠志 犀角 石曾根

必勝散

大黃 荊芥 芍藥 青皮 地黃
山查 木通 防風 桃仁 紫花地丁 水煎
蟬退 葛根 地龍 紅花 芦根

八物湯

當歸 川芎 芍藥 地黃
人參 白朮 茯苓 甘草

瀉肝散

羌活 當歸 山梔 龍膽 一方有木通柴胡黃芩
川芎 防風 大黃 無大黃

柴胡四物湯

柴胡 人參 黃芩 當歸 川芎 水煎
地黃 芍藥 地骨皮 麥門 淡竹葉

涼血四物湯

當歸 芍藥 地黃 黃芩 紅花
黃連 連翹 牛房 甘草

調元內托散

起發泡藥之時月事未來者不起發不灌平塌或白或黑陷者
黃芪 人參 當歸 桂枝 木香
青皮 芍藥 牛房 川芎

當歸養心湯

痘中經水忽行暴瘡不語者
人參 當歸 升麻 燈心水煎
地黃 甘草 麥門

安胎如聖散

孕婦出痘最要安胎
黃芩 白朮 當歸 連翹 砂仁 枳殼
甘草 大腹 陳皮 桑樹上羊兒藤 水煎

安胎飲

初熱既退諸症平準者
人參 白朮 黃芩 地黃 川芎 當歸
芍藥 砂仁 紫蘇 陳皮 甘草 姜棗水煎

安胎飲

痘出定後無痘者
人參 白朮 大腹 茯苓 砂仁
芍藥 紫蘇 香附子 甘草 糯米煎服
如有汗去蘇加黃芪胎漏者加阿膠百草霜變紅花

聶氏建中湯 建中湯同

娠娠
出痘

婦人
出痘

九味神功散

神効散同

發熱疑似之間

惺々散

人參 白朮 茯苓 天花粉
桔梗 細辛 薄荷 甘草

加減排膿湯

當飯 川芎 芍藥 人參 陳皮
甘草 白芷 山查 木通 桔梗

餘毒上攻眼目生翳羞明眩淚俱多紅赤腫痛者

羚羊角散

羚羊角 黃芩 黃芪 草決明 車前
升麻 芒硝 大黃 防風

玉鎖匙

咽喉腫痛飲食不入者
明砂 剉 撲 五合
姜蚕 一條 片腦 五厘
細末以竹管吹之

竇氣散

血至而氣不至邪熱不長或平或陷不充肥者
丹皮 荊芥 青皮 山查 穿山甲
牛房 木通 芍藥 强蚕 蟬退
如聲一珠臨服和菜蟲汁

敗毒和中散

初熱之時腹痛腰痛煩悶者
連翹 牛房 黃連 枳殼 防風
荊芥 桔梗 紫草 蟬退 川芎
前胡 木通 升麻 甘草 麥門

兜糞丸

瘵人眼或生翳障者
石決明 煨 草決明 木賊 桑葉 白芍 兔屎
防風 各二錢 當飯 五錢 穀精 草二錢
右蜜丸如菉豆大三五十九丸荊芥湯送下

涼肝明目散

瘵後羞明者
當飯 龍膽 川芎 蜜蒙花 防風 柴胡
黃連
各等分雄猪肝煮湯煎服一方加蟬退

仲景當飯四逆湯

當飯 桂枝 芍藥 木通
細辛 大棗 甘草

防風通聖散

防風 荊芥 連翹 麻黃 薄荷 滑石
白朮 山梔 大黃 芒消 石膏 黃芩
桔梗 甘草 川芎 芍藥 當飯

參砂和胃散

人參 編砂 半夏 白朮 茯苓
藿香 陳皮 甘草 干姜

獨參湯

人參 姜棗水煎 虛痘四日後諸症不穩者

參附湯

人參一 附一 熟附二 或 姜棗水煎 五日後純陰無陽者

護痘錦囊續編下終

附錄

疱瘡神の事

按あどるふ疱瘡神の説和漢ともは詳ならずりて
 あてハ樂官譜が耳食録は我眉山は姐妹三人麻の
 衣とききたる女仙ありて疱瘡と主たり人呼で麻娘と
 いふ神至て清淨潔白と好み穢不淨と嫌ふ又錢希言が
 繪園ハ呉の國疱瘡とありてある人ありて五郎神と
 堂は祭り牲と具ふ是と花花五聖と稱して志り
 すれば吉兆ありといふ又惡痘ハ別は痘司鬼といふ惡鬼



我眉山
麻娘の圖



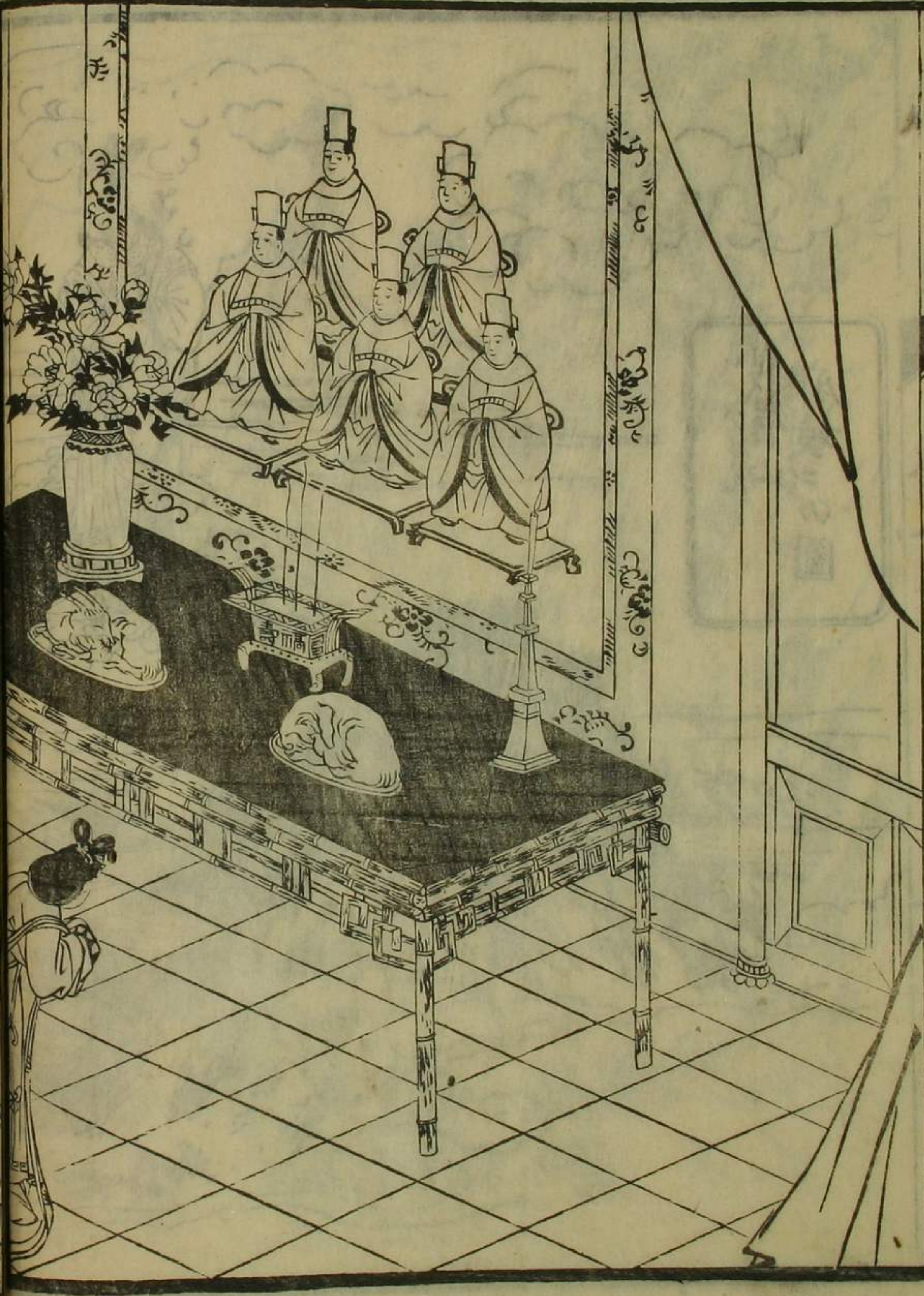
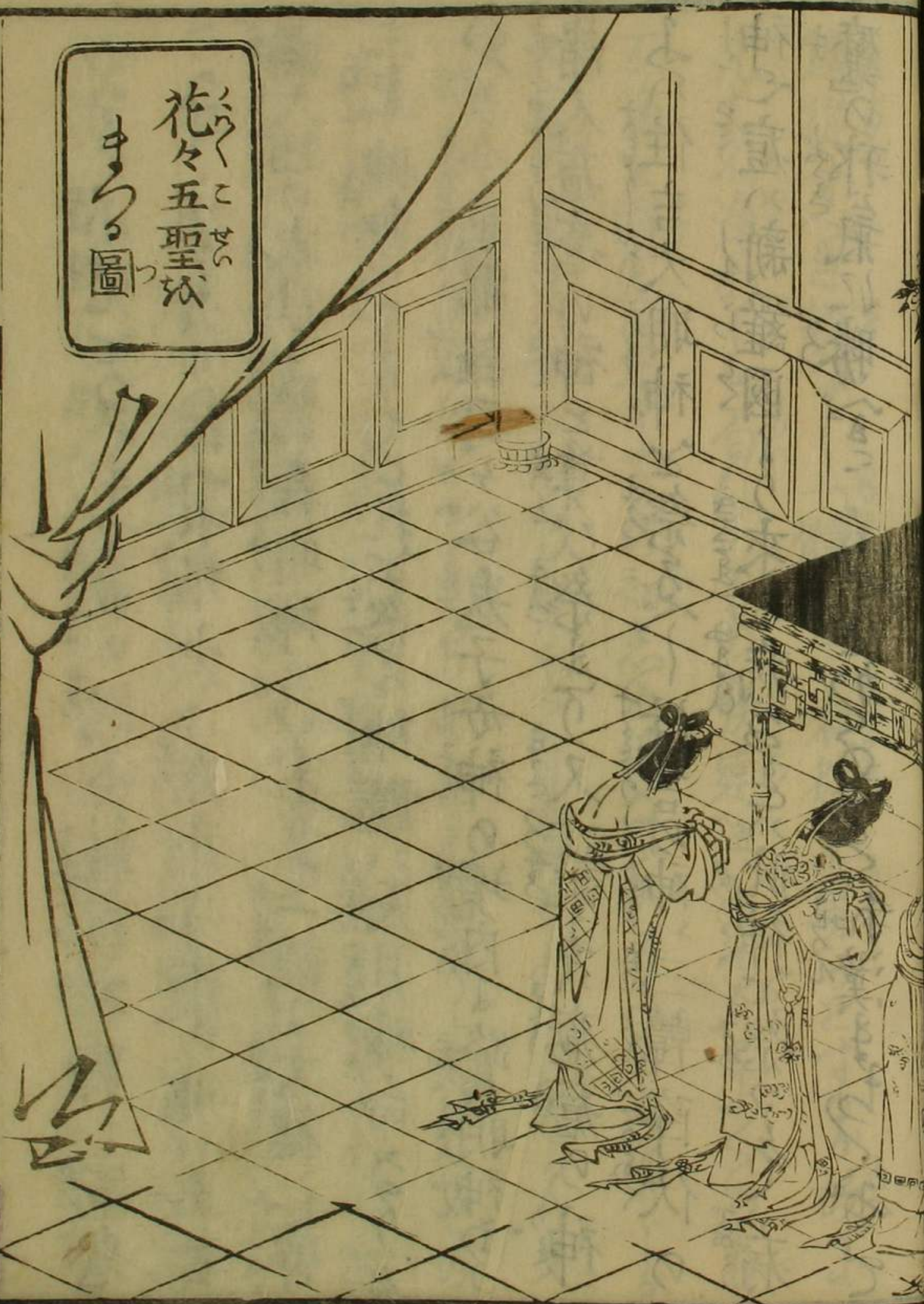
漢書卷之八

續下

花々五聖

三十三

花々五聖
中々圖



旨不至齋藏

あつて小兒と云ふは或の説は難痘ゆて果一冤鬼
 のうすくうとうりとのふ本邦ふてハ痘疹守護の神ハ出雲
 國大社の末社は鷲森明神といふありて一説は文徳仁壽
 三年神命よりこれと祭る神體ハ天月神命なりと
 今東都雜司ヶ谷鬼子母神の境内は鷲明神あり
 諸人疱瘡の神と尊び祭り又一説は疱瘡の神
 ふハ住吉大明神と祭るべし住吉の神ハ三韓降伏の
 神と痘ハ新羅國より來る病と云ふ此神を祭つて病
 魔の邪氣に勝ぶことりとかくのどく和漢まじりて

適從すべき説あり一體痘ハ表發と專らとするが故は
 凡て不淨ありき白ひのもの發達と云ふを云ふは
 不淨を避んくはふその初志ハ繩と云ふことりて何りし
 又痘の重きは神のからと云ふことりて見ゆれば夫より又
 一轉して神祭りするところと云ふことりてその
 主る神定るるす是らの夏醫家の拍るべきはありき
 且ハ強て辨せず痘瘡の家おのく心々よまらざる
 酒湯の調度 きぬかけ草ハ上の六葉目よあり
 衣類ハいづともあらの無紋なり或ハ男女醫者とも麻

續下

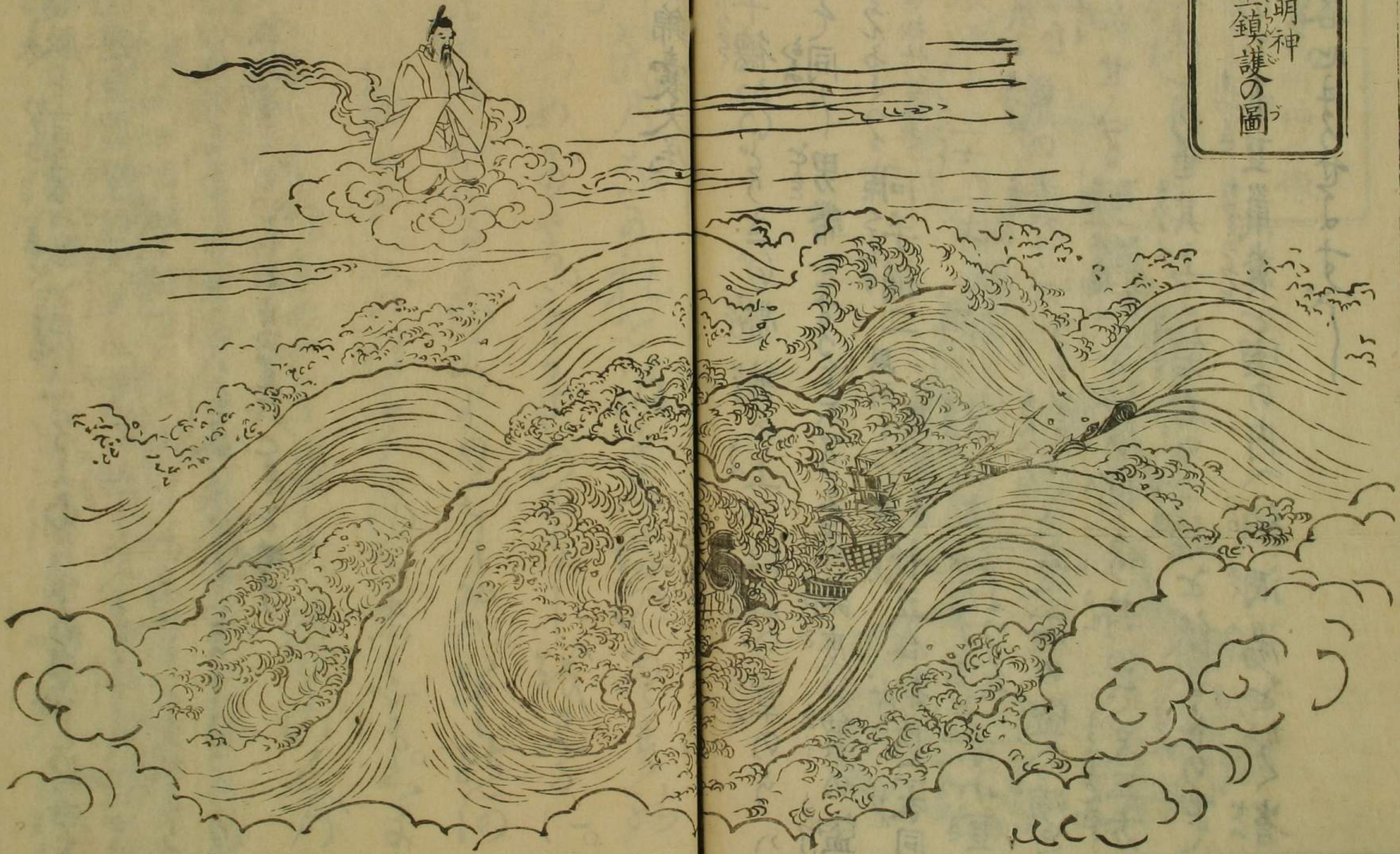
鷲明神 酒湯

疱瘡神
鷲大明神の像



上下十徳のどろさび帯等の上へ紅麻の單のうらハ
 襲あはしく同ト男帯おとことするところりその調度てうどハ質かたの鹽しほ
 一ツいっす ごらんみくつる 同手桶どうてづく二 馬同一ツハ湯ゆ 扱あ五合柄扱ごうがへ二本同
うら松竹と画がく 八寸水はつすんこ一三方一さん俵たわ一いっ箬すま三本 水引一本とああ赤小豆あかあずき
ごりき紙しのの糞くそ十二 三つぎきたる但 うらあはる右の鹽みへ湯ゆと
 酒さけと和あせあくる 湯一手桶と次つぎの間まり持もちいで又また三方
 一いっ俵たわとのせ其その上うへはは箬すま右みぎの二ふた種たぐひと紙しの包つつみのせ
 りちのあづき赤豆あづき糞くそと鹽しほの内うちへ納いれ酒湯さけゆとかく省せい
 略りやくハ各心あかくままるるせせよよすすべべ〜

住吉大明神
國土鎮護の圖



續下

住吉大明神

三十六

一通編脈を言ざる脈を用ひざるはあらず醫者とりども
 浮沉遲數緩緊弦大等の如きは辨しりども委曲を得がこ
 くり脈法と巨細は辨せざる自佳ことあらずはと云ふ筆のこ
 つら子へき所はあらず且痘の容解あらずはと云ふもの
 むく脈の素人のゆらぬ更なるはと云ふを略す

護痘錦囊大尾

小川氏乃其のれを汲る。石塚のあきき結。
 うきつめあらず。そのさのさう一紙見ると。
 此痘結出するあよりのさう。半結の
 あい。助ににおれさくゆく末も。ま
 ちくさうのあて。さう一紙のあ
 らあまのさうのさう。一紙のさ
 文やなり。さうのさうはなれぬさうの
 そのへ一紙ひよさのさうのさうのさう

結うきまじ束。うはれはてむさ。いとあま
 らしきうらやむかきし字。一日も突ぬし結
 判つてく。それ結はあにきうれし。
 やそ板あきし。あま乃國の。あつらひ
 するよ。あまし。あまの。あまの。あまの。
 のふつてく。あまの。あまの。あまの。
 あまの。あまの。あまの。あまの。
 結う。あまの。あまの。あまの。あまの。

ゆゑも。波ぬし。あまの。あまの。あまの。
 のれは。あまの。あまの。あまの。あまの。
 やれ。あまの。あまの。あまの。あまの。
 る。あまの。あまの。あまの。あまの。
 あまの。あまの。あまの。あまの。あまの。
 まあ。あまの。あまの。あまの。あまの。
 う。あまの。あまの。あまの。あまの。
 おほかけ。あまの。あまの。あまの。あまの。

文政甲申杣冬刻成

石塚汶上先生著目

京都寺町通松原下

護痘錦囊

二本

勝村治右衛門

困學穴法

袖珍本
全

大坂心齋橋安堂寺町

秋田屋太右衛門

同圖

經絡五色分
一枚摺

江戸日本橋通四丁目

傷寒論條牌

力文
二頁半
箱入

須原屋佐助

掌中麻疹方

折本
同

通一丁目

護痘須知

小本
一本

須原屋茂兵衛

種痘管窺

小本
一本

